

論説

介休の祆神楼と宋元明代山西の祆教

姜 伯 勤

(池 田 温 訳)

一九五六年池田温氏は「八世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」を発表し、漢地の祆教信仰について突込んで解明し、イラン学者ヘニング (W. B. Henning) が Baga の訳語を祆神とする論断を肯定した<sup>(1)</sup>。一九七八年饒宗頤氏は大著「穆護歌考」を発表し<sup>(2)</sup>、本論は特に従来人々のあまり重視しなかった宋代の祆教信仰・祆教音楽と文学に、我々の注意を牽き付けた。これら先人の啓発を受け、一九九三年に著者は中国社会科学院世界宗教研究所の『世界宗教研究』に「高昌の胡天と敦煌の祆寺」一文を発表した<sup>(3)</sup>。この論文公表後、中国社会科学院世界宗教研究所研究員で石窟・宗教考古学専攻の丁明夷氏の教示と激励を受け、筆者は山西省介休県におもむいて祆神楼の調査研究を行うこととなった。

介休の祆神楼と宋元明代山西の祆教 姜伯勤

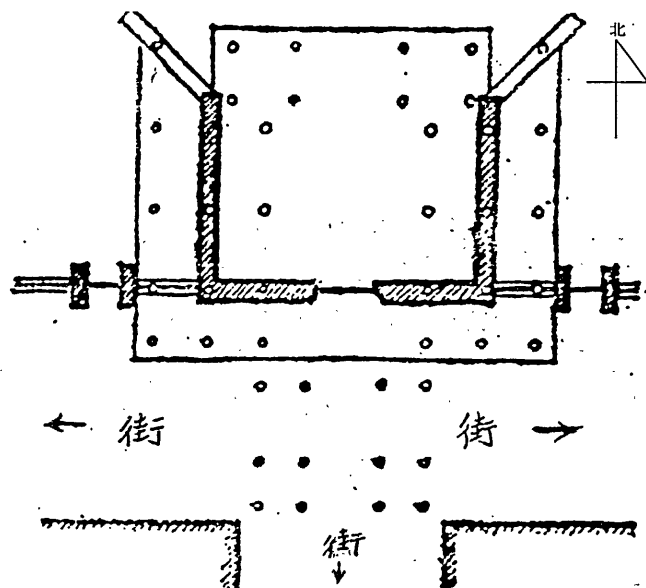
第八十卷 四二三

一九九六年中山大学博士課程院生の萬毅は介休県博物館の師延齡館長と友人の援助の下に、介休祇神樓建築と琉璃瓦裝飾の貴重な図版を多数入手することが出来た。同時に著者は香港中文大学饒宗頤氏が主宰される敦煌吐魯番研究中心で研究に従事する期間に、香港中文大学の蔵書を利用し山西の地方志に目を通して机上の準備作業を進めた。一九九七年七月、中山大学的姜伯勤・萬毅両名は、山西省考古研究所指導者任志祿氏と孟耀虎氏の親切なご配慮の下で、介休県祇神樓・祇神廟遺址と洪洞県祇神廟廢址を實地調査した。この調査では、介休市文化局常乃源局長・介休博物館前館長師延齡氏・現館長郝立國氏と呂增祿氏並びに洪洞県博物館前館長王紹明氏の指教をいただいた。太原では著者一行は山西文物界の耆宿張領氏と古建築家柴澤俊<sup>(4)</sup>氏を訪れ教益を蒙ることが深く、ここで謹んで上記諸先生に衷心の謝意を捧げる。以下調査と研究情況の概要を三章に分つて述べることにする。

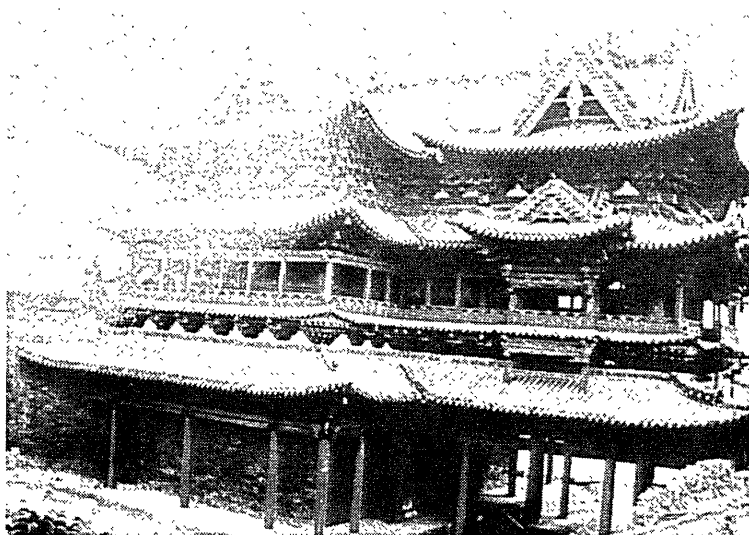
### 一 山西介休祇神樓石碑に見える北宋文彦伯の祇神廟建立記事

祇神樓は山西省介休外城の城関にそう大街に位置している。その平面は凸字形を呈し(附圖1)、全樓は三部分で構成される。南に向つて突出している過街樓は間口と奥行共に三間、山門と山門樓に連なりその機能は祇神廟の正門となつており、北面は更に樂樓に連なる。この第二部分は間口五間、全樓の奥行は二〇米に達する。

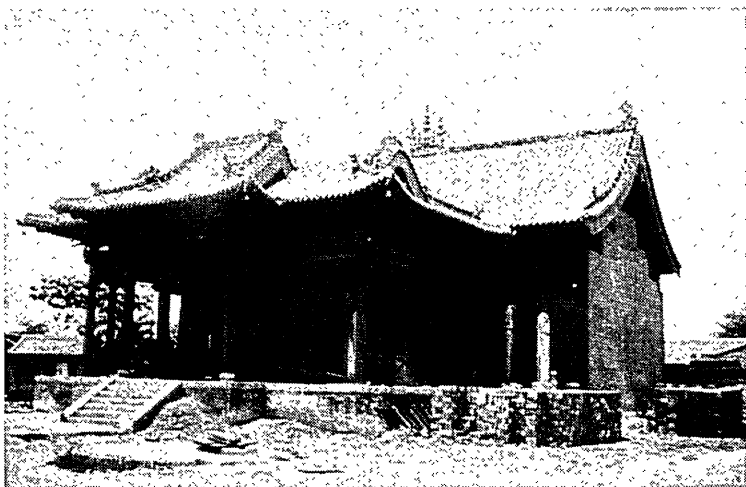
祇神樓は檐が四層をなし、下層は吹抜けで広々とし、中層は平座に欄杆が取付けられ、屋根は山形が十文字をなし、重なる檐の三面には夫々小厦が凸出している(附圖2)<sup>(5)</sup>。この祇神樓は、晉南万榮県の飛雲樓・秋風樓と三晉の三大名樓と併称される<sup>(6)</sup>。樓の頂きには明清時期の琉璃瓦の突起物がそびえ、西アジア・イラン風裝飾の影響が目立



附圖1 介休縣玄神樓平面圖（文物參考資料1954年11期）



附圖2 介休縣祇神樓（西側）



附図3 介休県三結義廟

旧祇神廟、1532年に三結義廟となる。  
其の前に1786年修建の献亭があり、数種の碑刻が安置されている。

つ。楼上には年代久遠の椽があり、椽上には獸頭が雕刻されこれまた西アジア・イラン風の著しいものである。祇神楼北面すなわち山門の後には北宋代に建てられたと伝わる祇神廟があり、明の嘉靖壬辰歲（一五三二）に改築され「三結義廟」となったが、清の順治己亥（一六五九）火災で焼け、同十七年（一六六〇）重建された。重建後もこの廟の木椽の上には依然として獸頭彫像が載っている。

祇神廟（三結義廟）（附図3）の前には清代の碑が幾つも建っている。それは

(1) 〈重建三結義廟碑記〉康熙十三年甲寅（一六七四）孟冬吉日立。

(2) 〈重修東關三結義廟捐資記〉

(3) 〈修建獻亭捐銀記〉

(4) 〈重修東關三結義廟記〉道光十七年（一八三七）立。

(5) 〈重彩碑記〉雍正七年（一七二九）立。

(6) 〈補修三結義廟西廊碑記〉康熙五十九年（一七二〇）

立。

(7) 〈新建獻亭兼修殿廡樂樓記〉 乾隆丙午（一七八六）立。

そのうち一六七四年に建った〈重建三結義廟碑〉に北宋の文彦博が祇神廟を建てた由来が記載されている。碑文の内容は次の通り。<sup>(8)</sup>（碑身高二米、幅八四厘米）

1 介邑之東關に三結義廟有り。其の初は三結義廟に非ず。盖し宋の文潞公特に祇神の爲に建てられしものなるのみ。其の規制の壯麗、氣象の崢嶸、一方の鉅觀を稱せらる。當年に在りて締造の意は平妖傳中に見ゆる者、固より因無きに非ず。然れども之を以て一方の血食を享け、

2 萬年の香火を受くれば侈り且た誣いられざらんや。ただ先賢の建つる所なるを以て未だ敢て義を輕んじ變置せず、故に久しくして相安んじ且た相忘らるるなり。越えて大明嘉靖壬辰歲、廷敕もて天下に淫祠を毀たしむ。

惟だ時の邑侯王公奮然として曰く、祇神の廟胡すれぞ來れるや！其の名號を稽うるに固より經典の未だ聞かざる所、

3 其の功烈を核ぶるにまた祀典の載せざる所、今日淫祠の毀たるる其れ斯に在る乎！然れども邪神を除き必ず須く正神を崇め、而る後以て魑魅を彈壓すべく、人の謫瀆の心を抑え人の剛大の氣を作し、因りて天地の間の忠廉節義の耿耿として不磨なるを思えば、熟（孰）か桃園兄弟の如く

4 千古に昭を爲す者有らむや！是に于いて遂に漢昭烈皇帝、關聖帝君、英烈王の塑像を王（正）殿に、武侯諸賢を東西兩廊中に配享し、因りて其の額に顔して三結義廟と曰う。此れ始めにして祇神廟と爲り、更めて三結義

介休の祇神樓と宋元明代山西の祇教 姜伯勛

第八十卷 四二七

廟と爲るなり。嗣後の人聖徳の

5 無私を仰ぎ、明威の赫有るに悚れ、高處に苾芬し歳に常期ありて百餘年來未だ戮れしことあらず。順治己亥孟夏の初旬八日に迨び、秩節修祀の事を興し、越宿して事竣るに忽ち漏下二鼓時に烈焰熾發り、煌煌熾熾の勢熨遏む可からず、旦に達り炎息み正殿東

6 廊・獻亭・樓閣已に盡く咸陽の灰燼と作れり。其の魯の靈光と同じく不朽なる者は則ち僅かに西廊數楹のみ。ああ！祖龍の燭禍之を生平の傳記に見る者、彈く述ぶべからず。然れども皆人に惡徳有るを以て、故に天災之に隨う。茲に何ぞ巍巍たる廟貌を以てまた竟に祝融氏

7 の一燎に供されむや？此れまた理の甚だ解すべからざる者なり。然りと雖も凡人の屋舍焚かるれば振作して之を更新せむと思わざるは罔し。所以に厥の居を奠め婦子を寧んじ、先人の堂構を衍す者之を勤めて敢て解けず。廟宇の災傷するに至りて反つて其の廢する者修めず缺くる者補わざるを聽し、遺像の儼然たるを

8 日に風雨の中に飄零せしめば、それ何を以て

9 神靈に妥い瞻拜を肅さむや！況や桃園の義は華夏共に仰ぎ、天下の立廟肖像する者王畿より海隅に達し、州郡より窮郷に逮ぶ何ぞ數え計るべけん。獨り此の一方の棟宇回祿の變に因りて蚤く之を爲めず、當日の邪を去り正を崇ぶをもつて名を更め位を定むるを將てするは何の謂ぞや？

10 まさにその之を舉げ敢て之を廢する莫きを稱するは何の謂ぞや？且た此の廟の肇めて修むるは、獨り神を徵え式穀以女あるを聽求するのみにあらず。南には綿山秀を獻じ、北には汾水清らかに環り、一方の風氣ここに

聚まれり。太皞令を司り此において神を迎う。青衿閣に入り此において駕を勸め、一邑の典故ここに存せり。

11 此に本關の紳衿張君煌・文君士興・高君圖南ら、鄉耆郝汝相ら、啓處遑莫きに毅然として身を以て之に任ぜむと欲す。慮る所は功浩く費繁く績を奏するに易からず、啻に長河の決するのみならず一手の能く障ぐあたわざるにあり。爰に我が郷の人士を集め共に相確（推）て、缺を補い廢を修むる

12 の舉、人々實に心を同じくするあり。たまたま汾守河道の馮公祖、廟前を經過ぎ焦頭爛額の狀を見、遂に慨然金を發せらる。而して吾が邑段の父母たちまた意を鏡めて修葺し士民の倡を爲す。すなわち故を革め新を鼎め端は今日に在り。時に余また濫りに座に未なり遂に走筆書引して

13 財を聚め工を塙り、此れより次第に舉行せり。工を順治十七年十月より起し、成るを康熙七年十月に告ぐ。其の規制の壯麗なる氣象の崢嶸なる、宛然舊の如く故に煥然觀の改まれるを覺ゆ。康熙十三年甲寅歲陽月の吉、余に屬し其事を記して以て諸を石に勒す。唯これを

14 唯（推）うに曰く、是の役や其の期限十年の久しきを程り其の金錢六千の多きあるを敷せるは、固より僅かに尋常の修補するものと同日にして語るにあらざるのみならず、いづくぞ説きて以て此に處くこと無かるべし。經營者の苦心と輸助者の樂善、以て住持の勞瘁・匠作の勤渠に及ぶまで、亦俱に

15 混没して傳わらざるべからず。余故に悉く紀し并せて之を書し、後の此地に居る者目撃して前修に繼ぎ、斯の年を萬憶えて永えに傾き圯るるの患無からしめむ。庶わくは従前改建の意と今日の重修の意兩つながら負く無かれと云う、是を記と爲す。

大清康熙十三年歲次甲寅孟冬吉日立つ。

(以下署名省略) (第八行字數が少いの、神。  
字を九行頭に抬高した爲)

この碑文により下記の事實がうかがわれる。

(一) 「祇神廟」或いは「祇神之廟」「蓋し宋の文潞公特に祇神の爲に建つるのみ」

宋の文潞公とは北宋の名相文彦博のことである。祇神樓の西側が「文潞公祠」であり、文彦博(一〇〇六一—一〇九七)を奉祀する「文祠堂」である。そこに宋の元豊三年(一〇八〇)司馬光の撰した「文潞公家廟碑」があり、洛陽の原碑に拠り復刻したものである。<sup>(9)</sup>「介休県志」によるとこの廟の建築は明の万曆庚子年(一六〇〇)・康熙三五年(一六九六)・乾隆三五年(一七七〇)の修建を経て、嘉慶十九年(一八一四)重修されている。「重修介休県志」卷一四雜志に云う。

妖(祇)神廟。相傳うるに潞公の未だ第せざる時妖(祇)狐形を現して曰く、公は後必ず大いに貴し。願わくは朝夕に灑掃を供されよと。未だ幾ならずして踪を潜む。貝州の王則を征するに及び、また形を現し戦を助け頼りて以て凱を奏せり。公は其の義に感じ廟を建てて之を祀る、榜して「元神廟」と曰えり。蓋し白狐は千年にして化して元と爲ればなり。後ままた出でて崇りを爲し里人は之に恃る、亦能く隠れて其の福を致す。故に香火數百年を歴て衰えず。明の嘉靖十一年に至り天下に詔して淫祠を毀たしむ。知縣王正宗困りて改めて三結義廟と爲す。たまたま順治十六年四月初八日、祀事既に畢り漏下二鼓のとき烈焰熾發り竟に焦土と成る。論者以



て妖（祓）神の餘孽の致す所となす。

按ずるに古より未だかつてその廟を自ら「妖」神廟と称する者はなく、「妖」は「祓」の譌であり、「祓（yao）」或いは「祓（kian）」と解すべきである。祓は希烟の切、この字は「隋書」に見え、今日「玉篇」に祓字があり示に従い天に従っている。或いは隋唐間に古本「玉篇」に孱入したものという。<sup>(10)</sup>「通典」の読音は呼朝の反に作っており、介休の方言では祓（kue）、玄（kue）と発音して相通ずる。<sup>(11)</sup>そのため後世では相傳えて傍して「玄神廟」と曰う（祓神楼も別の一名は玄神楼）。清代の地志の中では又康熙帝の玄燁の諱を避けて「玄」を「元」に改めている。故に「祓神廟」は清代の記載で「元神廟」と伝写された。そこで清代の地志作者がまた白狐千年化元の伝説に附会するに至ったのである。

(二) 碑に云う祓神廟「當年締造の意『平妖傳』中に見ゆる者固より因無きに非ず。」

北京大学図書館蔵の明刻四卷廿四回の羅貫中著「三遂平妖傳」<sup>(12)</sup>には文彦博が介休に祓神廟を建てた事は記されていないが、但だ文彦博の貝州を征した事を記す。従つて碑文に「『平妖傳』中に見え」と記されるのは、文彦博が貝州の王則を征伐した時祓神が形を現したことを指し、そしてこれを以て「締造の意」と為したのである。

文彦博が貝州の王則を征つたことは正史と筆記に見えている。中山大学の何竹淇教授が生前編纂した「両宋農民戦争史料匯編」には、王則征討にかかわる採輯史書が凡て二九種に上る。<sup>(13)</sup>「宋史」卷二九二明鑑伝に云う、

王則叛す、（明）鑑に命じ體量安撫使と爲すも則未だ下らず。又參知政事文彦博に命じ宣撫使と爲し鑑を以て

之に副たらしむ。貝州平ぎ……彦博數ば鎬の功を推し參知政事を拜す……王則はもと涿州の人、歲饑え流れて恩州に至り自ら賣り人の爲に羊を牧う……恩・冀の俗、妖幻相ともに《王龍》《滴泪》等の經及び圖讖諸書を習い、釋迦佛衰謝して彌勒佛當に世を持たんと言ふ。……約すに慶曆八年（一〇四八）正旦を以て……河北を亂し……則は東平郡王と僧號し……文彦博至るに及び……總管王信は則を捕得し……則を京師に檻送し支解して以て徇う、則叛して凡そ六十六日なり。

山西の介休は文彦博の故郷である。文彦博が王則を平定した故事は「平妖傳」成書の前から既に南宋の説話人の書坊に流行していた。<sup>(14)</sup>「介休県志」に載る前代の口碑によれば、介休県人文彦博が貝州王則の彌勒教烽起に打勝つ過程で、文氏が軍事力に頼る際これらの祇神に対する信仰にたのむ所があったのである。

山西は中國で最も早く祇教の流伝した地方であり、宋の姚寬「西溪叢語」卷上に云う、

宋次道「東京記」の「寧遠坊に祇神廟有り」注に……或いは晉の戎、華を亂せる時に此を立つと傳う。<sup>(15)</sup>

晉の戎が華に入りし時祇神廟を立つとは、すなわち山西地区の後趙石勒が建てた「故天」祠を指し、胡天とは即ち祇神廟のことである。

北宋初年、祇祀は新たな王朝の祀典に列せられ、山西地区の澤州・潞州・河東には俱に宋太祖が祇を祭った記載がある。北宋の汴京・楊州・鎮江・沙州諸地にも俱に祇神廟があった。此の時代に流行した風俗では、人々が祇神廟で健康を祈求し、科擧の及第を祈求し、征戰の勝利を祈求し、官庁の礼官が行う祇神の祭祀では雨を祈っていたのである。

(三) 祇神廟の役割の一つは征戦の勝利を祈求すること

上述した背景の下で、我々は『介休県志』に記された文彦博が科擧に受かる前と征戦の際、祇神に祈求したという記載は信用できるものと認める。祇神廟で戦いの勝利を祈った例は、宋代の他の東向きの祇神廟にも見出される。『至順鎮江志』巻八廟、本府に云う、

火祇廟 もと朱方門の裏、山岡の上に在り。…宋の嘉定中山下に遷る。(郡守趙善湘この廟の高く山岡に在り郡庫に便ならざるを以て、遂に山下に遷す。廟の門は東に面し、郡守の祝板にはもと「祇神祇に致さず」の句あり)。端平間に毀たる。(端平乙未(一二三五) 防江寨中軍に變作り神に捧る有りて、その神之を許し事定まる。郡守吳淵その廟を毀てり。)[宋張邦基『墨莊漫錄』巻四に「鎮江府、朱方門の東城上に乃ち祇神祠あり、何人の立つるかを知らず」と云う。]

祇神廟の職能の一角、戦いの前に「神に捧る有りてその神之を許し事定まる」所にあった原因は祇神廟に Verethraghna と名付けられた勝利の神が奉祀されていたからである。著名な祇教史学者ボイス (Mary BOYCE) の研究によると、勝利の神 Verethraghna は別名 Varahram, Vahram, Bahram, ソグド人は Washagh とよんでいた。この神は祇教のアフラ・マズダ (Ahura Mazda) 大神の創造にかかり、ゾロアスター教の経典『アヴェスタ』(Avesta) 中のミトラ (Mithra) に捧げられた賛美詩に、この神はいつもアフラ・マズダの前面にいて悪者を随時粉碎できる準備をする姿に描写されている。<sup>(17)</sup>

中央アジアのソグド地方で Verethraghna に関する壁画が発見された。一九九〇年に B. M. MAPLIAK, B. M. POCHTOBOA は、一九八六年発掘の完了した古代ソグド遺蹟、すなわちウズベキスタンのパンヂケント (Panjikent) P-86XXV-28 遺址南壁に Verethraghna と Cista 女神の並坐像のあることを指摘している。アヴェスタの中でこの両神は戦いに関係するという共同特徴を有する。該遺址東壁の南面壁画に残破せる一王者の頭冠に有翼駱駝が絵かれるが、翼のある駱駝は勝利神 Verethraghna の化身に他ならない。<sup>(18)</sup> 要するに Verethraghna は勝利の神であり、また軍神である。<sup>(19)</sup> アヴェスタのヤシュト (Yast 賛頌書) 第十四章に云う。

我々はアフラの創造された Verethraghna を奉祀する

そこに列擧されたこの勝利神の化身は、風・牡牛・馬・駱駝・牡野猪・青年・鷹・牡羊・黄羊・武士の十種である。<sup>(20)</sup> またライス (J. T. RICE) 著『中亞藝術史』に、飛翼と長大な尾をもつ有翼神獣の織出されたベルシャ錦が見え、この種の翼獣はセンメルヴ (Sennerv) と認められる。<sup>(21)</sup> ソグド壁画を研究したアリバウム (J. M. ALIBAYUM) は、これら Sennerv や翼馬及びその他実在乃至神話中の鳥獣も Verethraghna 等諸神の象徴と解釈する。<sup>(22)</sup>

上述の祇教々義と祇教図像学に拠ると、我々は文彦博が戦いに勝った時見たという「祇狐」は、Verethraghna 勝利神の化身たる神話中の瑞獣であったと認められる。この種の祇教の観念は中国化して以後、文彦博の故郷山西省介休一带に流伝する「白狐千年化して元と爲る」<sup>(23)</sup> 伝説になったとみられる。

以上述べた如く北宋慶曆八年(一〇四八)文彦博が貝州の王則を征討し勝利した後、彼の故郷介休には「文潞公祠」(文祠堂)が建てられたばかりでなく、祇神廟も建設され、廟前の山門が華美を極めた祇神楼であった。この廟

はずっと明の嘉靖壬辰年（一五三二）まで約五〇〇年存在した。前引の康熙遺碑に「其の規制の壯麗、氣象の崢嶸、一方の鉅觀を稱せらる」また「然れども一方の血食を享け萬年の香火を受く」「ただ先賢の建つる所なるを以て未だ敢て義を輕んじ變置せず、故に久しくして相安んじ且た相忘らるるなり」とある通りである。これによれば一七世紀中葉から一六世紀中葉まで介休祇神廟と祇神樓は奇蹟的に保存されたが、これは當然北宋の名相文彦博が本祇神廟の創建者であり、かれの巨大な功名のおかげを蒙ったことと分ちがたく結ばれている。

## 二 介休の祇神樓・祇神廟古建築の木椽及び瑠璃瓦の祇教圖像遺存（附図4、5、6）

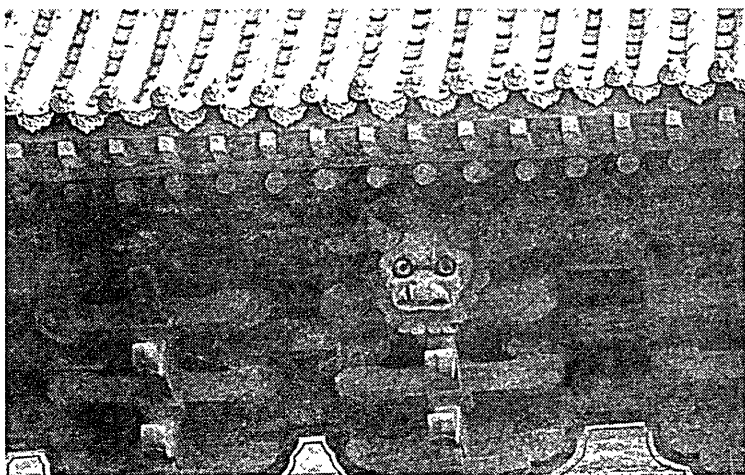
康熙年間の廟碑によると、嘉靖壬辰年に祇神廟を三結義廟に改造して後、三尊の塑像を供奉する正殿と配享者を供奉する「東西兩廊」があった。すなわち当時の祇神廟は正殿と兩廊を有し、今日石碑のある正殿の外の献亭は、〈修建獻亭捐銀記〉と〈新建獻亭兼修殿廡樂樓記〉<sup>(23)</sup>によると乾隆丙午（一七八六）に新建され、この献亭は原祇神廟の旧物ではない。原祇神廟は火災でくり返し重建されたが、後世重建されたものにも当年の祇教像が木像や屋根の琉璃瓦に保存されている。

### （一）祇神樓木椽の有角牛形天神の崇拜

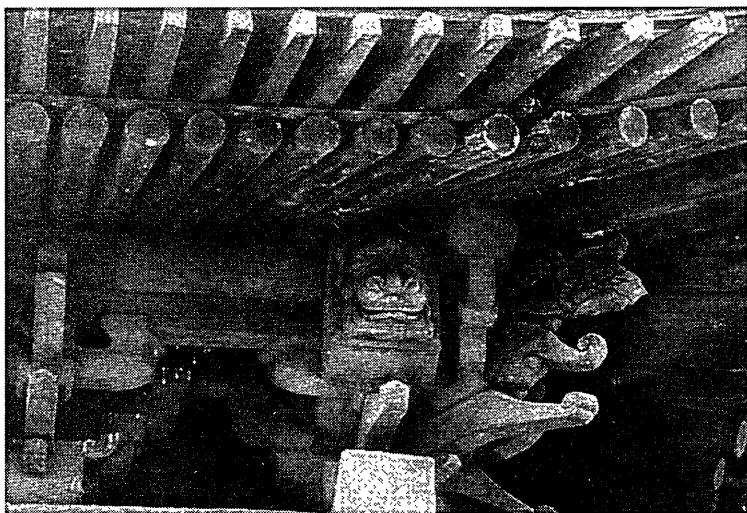
祇神樓の木組には、

西側頂層の横梁の椽口に南北夫々木雕牛頭がある。南側の牛頭には耳と牛角、

介休の祇神樓と宋元明代山西の祇教 姜伯勤



附図4 祇神楼木椽にみられる牛頭の雕像



附図5 旧祇神廟にみられる神獣頭の木雕及び獨角奇獣の木雕（重修）

北側の牛頭にも角と耳が附いている。

祇神廟の東面にも二個の牛頭があるがこれは後世の仿制である。

アヴェスタ中の勝利神 Verethraghna に十種の化身があり、ヤシュト第四章勝利神の化身たる美しき牡牛の賛頌 (Avesta II.) に云う、

6 我々はアフラの創られた Verethraghna に献祀する……

7 アフラの創られた Verethraghna は第二種化身になるや一頭の美しき牡牛の姿になり、一對の黄色の耳、一對の金色の角。<sup>(23)</sup>

林悟殊氏の所論によると、一三世紀のムスリム作家は、伝説のルスタム時代から伝わる Sagistan の Kar-kuye 古城中最大の火廟には、

この二座の建築上部には二個の角、湾曲して向い合う丁度二個の牛角の如きがある<sup>(25)</sup>

という。介休祇神樓の頂層の椽の二牛木雕像は、まさにヤシュト十四章に記す所と合致し、祇神廟旧址に復原された屋根の両すみの斗拱の上にも兩牛の形があり、復原作品とはいえ拠る所が有ったであろうし、Sagistan の火廟の牛角建築との比較に資すべきである。

林悟殊氏はゾロアスター教原始經典について説明されているが、そのヤスナ (Yasna 祈祷書)<sup>(26)</sup> にも牛魂を賛美する神歌がある。ヤスナ第二十九章は舞台となる靈界の法廷の第一頌に牛魂が出現し、その法廷には地上の牧者も陪審として出席している。

1 御身どもに牛の魂は「こゝう」訴えた「誰の為に私を御身どもは創造したのですか、だれが私を造成したのですか。……」

2 そこで牛の造成者はアシヤに「こゝう」たずねた「御身は「一体」牛の為の裁き人をおもちですか——その「牛の」支配者たる御身たちが、牧地とともに、牛飼いの熱意をも作り出される為にです。……」

3 彼（牛）にアシヤを通して「牛には抜苦的援助者なし」と「御身さまは」返答し給うた。……

（中略）

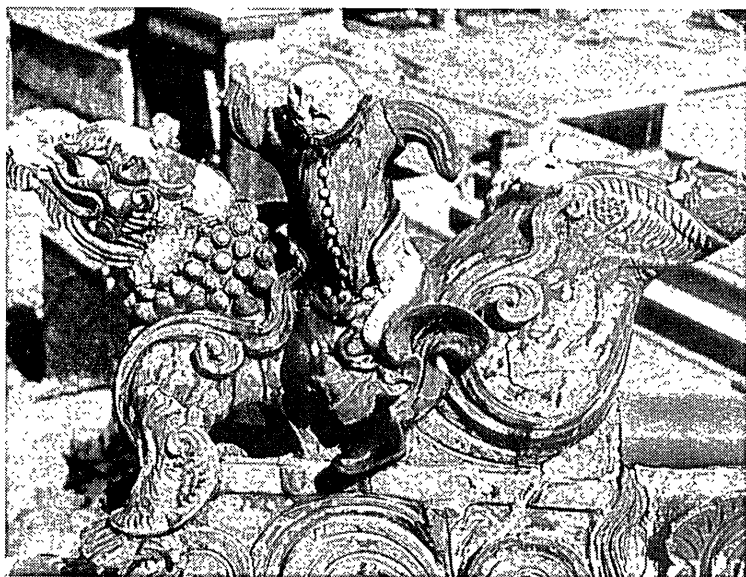
11……「牛魂曰く」「アフラよ、いざ、われらのもとへ降臨を「してください」——御身たち様への、われらが供物にめでて<sup>(27)</sup>。」

文彦博の貝州王則征討勝利を記念する為に西暦一一世紀に介休に祇神楼が建てられた時、すでにこの木椽上の牛頭雕像はあつたであらう。この種の牛の造像は或いは文彦博の貝州王則征討の故事とも関係があるかもしれない。司

馬光「涑水記聞」巻九に云う、

〔慶曆〕八年正月丁日、〔文〕彦博を以て河北巡撫使と爲し諸將の貝州を討つを監せしむ。……牢城の卒董秀・劉炳あり地に穴ほりて以て城を攻めんと請い彦博之を許す……既にして穴より出で城に登つて守る者を殺し、紐を垂れ以て城下の人を引かんとし城中驚援す。賊は火牛を以て城に登る者を突き、城に登る者拒む能わず<sup>やひきしぞ</sup>頗引卻く。〔帳前虞候〕楊遂力戦し身に十餘創を被るも槍を援り牛を刺し、牛は卻走して賊を踐し<sup>ふみこ</sup>賊は遂に潰<sup>ゆ</sup>。





附図6 祇神楼の琉璃瓦装飾にみられる胡服騎士及び有翼獸（騎士頭部破損）

一〇四八年文彦博は地下道戦で貝州城に攻入り、王則が火牛でふせこうとし後に火牛の退卻により王則の軍隊が蹂躪され文彦博が勝利を得た、この故事もまた介休祇神楼に神牛の像が高く掲げられた近因となったであらう。

祇神廟（三結義廟）の東北角と東南角の斗拱の獸頭木雕も、或いは祇教の動物崇拜の信仰を反映しているらしい。その中の独角怪獸は羅豐氏編著「固原南郊隋唐墓地」四四頁右上方の独角怪獸と比較されよう。<sup>(28)</sup>

(二) 祇神楼屋根上琉璃瓦の胡服騎士と有翼獸（附図6）

西アジアイラン風の一有翼獸に胡服の騎士が跨り長靴をはいている琉璃瓦が、祇神楼の屋頂に乗っている。胡服の者は皮のズボンに腰にまとい、後から見るとそれがはつきりわかる。又別の帽子をかぶり獸に乗る胡

人の琉璃瓦が介休后土廟三清樓の垂獸に転用されている。ソグドの壁画芸術を研究したアリバウムは「アフラシアブ絵画」の中で、「まさにこれら Sennerv・孔雀・鵝鳥・猪頭・山羊・翼馬及その他実在乃至神話中の鳥や獸、これらはすべてササン朝のゾロアスター教の觀念にかかわっており、原則的に「アヴェスタ」祭祀の中から生れ、…… Verethragha 神・ミトラ神等諸神の属性を有する。」<sup>(29)</sup>と指摘する。又「西方藝術における東方からの影響」でも「ゾロアスターの經典の中で Sennerv は湖中の小島に住み、Hom 聖樹上に棲息し Kara 魚に護られている。」<sup>(30)</sup>「アヴェスタの最古の概念は Caenamereto をメソポタミアの竜に相当するものとみなし、それは地上の豊饒をもたらし、水に潜る占ト鳥であった。最も古い Sennerv 図像は西紀前六世紀のスキタイの黄金劍鞘に見え、一個のグリフィン (griffin)、獸身に鳥尾のある姿が描かれている。」<sup>(31)</sup>と述べている。

介休の翼獸は一見すると Sennerv のように後足がはつきりせず鳥尾によく似ているが、仔細に観察するとその後足が上に向つてはね上がっており、実際は四足の有翼獸に他ならず、Sennerv は前に二本の獸足、後に鳥尾があるのと異なる。翼獸或いは瑞獸に乗る図像は、祇教美術中に常見し、田辺勝美氏の分析した獅子に乗るナナ女神<sup>(32)</sup>、パンデケントXXV発掘区12室出土の獅子に乗る七女神 (MAPIAK, PACHOIOBA, UKODA, 1983, 図<sup>(32)</sup>)、バルティム出土銀碗内の獅子に乗るナナ女神<sup>(33)</sup>があげられる。つまり所、介休の胡服で瑞獸に乗る琉璃瓦の塑像には、濃厚なる西アジアラン風が認められるのである。

### 三 附論 北宋祀典と宋元明清初山西省の祇廟

北宋仁宗の時代、文彦博が貝州を征討した事件に淵源をもって建てられた祇神廟と祇神樓の再発見は、我々に一個の重要な事実を教える。唐の武宗会昌年間に祇教廢毀が宣布されて以後も、北宋から元代まで山西地方の祇神信仰は絶えざること縷の如く存続していたのである。その中で北宋が高潮期、元代も別の高潮期であった。

#### (一) 北宋祀典中の祭祇と山西地区

『宋史』卷一〇二礼志に云う、

建隆元年（九六〇）太祖は澤・潞を平げ、仍お祇廟・泰山・城隍を祭る。揚州・河東を征し並びに此の禮を用う。（標點本二四九七頁）

すなわち宋初山西の沢州・潞州及び河東の三地を征服した江南の揚州を征した時、それらの地にはいずれも祇廟が存在したのである。『沢州府志』卷四九紀事に「建隆元年夏：丁巳、詔して親征し、…丁卯…大駕親臨し一鼓にて平ぐべし」とあり、『潞州府志』卷一五に「帝は北漢を親征し潞州を過ぐ」と見えるが祇廟への言及はない。唐代の官僚による祭祀では合法的祇祭は兩京と河西諸州に限られていた。『新唐書』卷四六百官志祠部条に云う、

兩京及び磧石諸州の火祇、歲ごとに再び祀り、民の祈祭するを禁ず。

北齊の太原には「薩宝」<sup>(34)</sup>があり、又祇教の葬俗<sup>(35)</sup>が存した。しかし唐代の祀典では上記の諸地方の祇を祀る事の許さ

れた記録は見出されない。五代を経て北宋になり、太祖が沢・潞・河東を親征し祆神を拜したので山西の祆祀が合法的礼祀となった。『宋会要輯稿』第一八冊礼の一八祈雨に、

國朝凡そ水旱災あれば祈報之禮あり。祈るには酒脯醢を用い、報ずるも常祀の如く……京城……五龍堂・城隍廟・祆祠……以上は並びに敕建にして官を遣し……

大中祥符二年（一〇〇九）二月詔す、聞くが如くば近歲官に命じ雨を祈る……又諸神祠の天齊・五龍には中祠の例を用い、祆祠・城隍には羊八邊八豆を用う。既に牲牢の禮料を設けたれば、其の御厨食・翰林の酒・紙錢・駝馬等は更に復た用いず。

とある。以上の記載は、(一)北宋初の山西の祆祭は正に京師や揚州の如く、皆朝廷が認可せる礼典の許容した祭礼であつたこと、(二)祆を祭るには紙錢を用いず、羊など「牲牢礼料」を用いたこと、を明らかにする。これがすなわち介休祆神棲碑文に「然れども之を以て一方の血食を享け萬年の香火を受け、き修らず且また誣しいられざらむや！ただ先賢の建つる所なるを以て未だ敢えて義を輕んじ變置せず、故に久しくして相安んじ且た相忘らるるなり。」と述べる所に当る。実の所此の碑文作者は、すでに北宋では介休祆祠の「一方の血食を享く」が、当時国家祀典の認可するものであつたことを忘れていたのである。<sup>(36)</sup>

## (二) 元代山西の祆神廟

一九四一年劉銘恕氏は曾て『金陵學報』一一卷一期に「元人雜劇中に見える火祆教」を撰し、饒宗頤氏の「穆護

歌考」はまた元曲中の祇教音楽について詳論された。元代雜劇の發達は特に山西を要地とするもので、一四世紀初には山西省にまず祇神廟の興建があつた。光緒十八年刊本「山西通志」卷一六四祠廟に云う、

洪洞縣 祇神廟は德化坊に在り、元大德七年（一三〇三）建つ

【洪洞縣志】（二九一七年刊本）卷八に

祇神廟、縣大南門内の路東城根に在り、元大德七年建つ。正殿は五楹、享亭は東西廻廊各五間、南は戲樓を爲し門は中に居り、左右角門各一。東西は鐘鼓樓にて元至大二年邑人商德夫重修せり。前明暨清の乾隆・嘉・道間に屢しばしばば修葺しうきやうを経、咸豐・同治に之を修復す、碑記あり。

とある。祇神廟は「縣の大南門内の路東城根」にあり、洪洞縣博物館の王紹明前館長の紹介によると、その旧址は現在の飛虹映画劇場あとにある。王氏は少年時代に此の廟の遺址を見たことがあるという。県志の記す元の至大二年（一二〇九）邑人の商德夫が重修した点につき、王氏は大南門の南面の向いの通りに「商家樓」があり、明代の建築の過街樓（通りの上に誇る建築）で「三輔三券」「一豎一丁」の建築様式をもっていた、そして城内にはまた商家巷もあつたと語られた。県志の記載で見ると、元代洪洞縣の祇神廟は正殿五楹に鐘鼓樓もあり、その建物は現在洪洞縣に保存されている関帝廟とは同じく、享亭は東西の回廊が各五間あり、これによつて祇廟に奉祀された神像の夥おほいしかったことが想像される。元明時代山西でひろく戲樓が建てられたのは、多く神に酬むかひる祭祀と關係する。洪洞縣の元代祇廟の「南は戲樓を爲し」とあるのは我々に元曲、元雜劇と祇廟の關係を想起させる。

【西廂記】二本四折〈得勝令〉に（王季思校注本、上海古籍出版社、一九八七、八〇頁）

## 不鄧鄧（一に赤騰騰に作る）點着祇廟火

（田中謙二訳「こころ」と祇廟の火はもえさかる」中国古典文学大系「戯曲集」上、平凡社、四四頁上）

とあり、神田喜一郎氏は早くその出典が明の彭大翼撰・張幼学編「山堂肆考」官集卷三九公主条に引く「蜀志」なる点を指摘されたが、<sup>(37)</sup>「蜀志」には「祇廟は胡神廟なり」と見える。元曲中には「祇神廟」「祇廟の火」「火が祇廟を焼く」類が頻出するが、「祇廟を焼く」典故の用例は「西遊記」五本第十七〈金盞兒〉に「藍橋を沈め、祇廟を焼く惡神將、唐僧に比し、様子更にすさまじい」、「争報恩」一折〈混江竜〉に「我今夜かの祇廟に火を放ち、水で藍橋を押流さん。」「倩女離魂」四折〈古水仙子〉に「この姻親が旧監とは思ひもよらぬ、祇廟の火のめらめら燃上るを待たん。」「誤失金環」三折〈尾曲〉の「日に日に花の色もうすれてしまふ、誰か祇廟のほのおに焼かるるのを眺むるや。」「太平楽府」卷七無名氏散套〈鬪鶻鶻・妓好睡〉の「祇廟の火に焼かるるは知らず、藍橋の水に溺れ死ぬもいとわず。」「誤入桃源」四折〈雁兒落〉の「暮には天子の堂に登る筈、夜祇神廟に宿るとは。」等枚挙に遑ない。<sup>(38)</sup>

明人凌濛初は「譚曲雜割」を著して云う、「元曲の源流は古樂府の体にあり、故に方言・常語が重なり章をなし、一種の故実にこだわらず、役に立つものはその本身に即し、藍橋・祇廟・陽臺・巫山の類の如く、之を採入れ警句とするが、そのまま詩句とはせず、他の典故で間に合わせる訳ではない」と。<sup>(39)</sup>これによって「祇廟」一語は元代人の方言・常語であったことを知る。

元曲中には又〈祇神急〉の曲調があり、元人周德清「中原音韻」に「双調一百章」の内に〈祇神急〉<sup>(40)</sup>があり、明

の寧獻王朱權「太和正音譜」にも「双調一百章」内に〈祇神急〉があり、元曲中で常に此の曲牌が用いられる。又清の李王「北詞広正譜」五十調にも双調〈祇神急〉が含まれ、祇神急は北曲の小令である。<sup>(42)</sup> 任半塘氏は云う「穆護子はまさに穆護砂と同じく大曲穆護から出、北曲の仙呂宮の祇神急と関係があるはずだ」<sup>(43)</sup>と。穆護歌については饒宗頤氏の考証が甚だ詳密である。宋の姚寬は「穆護はもと祇廟賽神の曲」と謂い、明の楊慎「詞品」はそれを「隋朝の曲なり」と謂い、方以智は「樂人奏して以て水調と爲す」<sup>(44)</sup>と謂う。北齊隋唐時代、祇廟が中土で極めて盛んな時は祇廟の神に賽<sup>そな</sup>える曲も一種に止まらなかったが、元代に至り少くも以下の数種が知られる。彰徳の〈木斛沙〉、元の燕南芝庵「唱論」に「凡そ唱曲の地所……南京に生査子を唱い、彰徳に木斛沙を唱う」とあるもの、元の宋娶に穆護砂・燭淚長調、又北曲中に祇神急があり、「唱論」に「雙調の唱、健捷にして激盪」と云い節奏がつよくはやか<sup>(45)</sup>った。穆護は祇廟の祭官で、祇神は祇廟が奉祀する神格であつた。穆護と名付けられた二種の曲は、ともに祇廟の賽神曲であつたに違いない。饒宗頤氏は「穆護歌考」一文において元代になお宋娶の書いた〈穆護砂・燭淚〉<sup>(46)</sup>「疆村叢書」<sup>(46)</sup>「燕石近体樂府」があり、北曲に朱庭玉撰〈祇神急〉<sup>(47)</sup>「朝野新声太平樂府」のあつたことを指摘されている。

山西省元代の洪洞県祇神廟戲樓の歴史は我々に、中国にあつた祇神廟の多様な機能の中に、ソグド人の胡風音楽文化の伝播があつたことを教える。祇神廟の保存は、西域文化の打寄せる一波また一波の影響と相関わる。ウイグル時代に祇教徒は依然ウイグル汗国に往来していた。「イドリースは曾て九姓の祇教に言及し、ヤクートも大食の旅行家テミムの説により、祇教徒の九姓回鶻に赴く者が甚だ多くマニ教徒は最も少く、ただ可汗の処る都城で優勢

を占めるにすぎぬ、この都城はビシュバリクではなく吐魯番の東カラホジャにあった<sup>(48)</sup>と伝わる。こうした北西の形勢が宋元明代の中土における祇教の保存に影響した。但し山西省の宋元祇神廟の保存は、畢竟どのような西域文化の波に影響されたか、なお研究に待たねばならない。

本文の以上の研究は、介休祇神樓は明清時期の重修建築にもかかわらず、その木椽の端の牛頭雕像や犬頭雕像はその期限或いは原型を宋元時代まで遡ることが出来る点を示している。ゾロアスター教の文物はササン王朝滅亡後パルシア本土では大量に湮滅し、従って介休の文化財遺蹟の価値は充分貴重であり、その発見はインドのボンベイのパルシー人における拜火教遺物やウズベキスタン・タジキスタン発見の祇教壁画や敦煌白画中のソグド女神とともに、世に稀なる祇教遺物中の一部を構成し、併せて宋元時期中国の祇教史研究の深化に新たな契機を提供するものである。

## 註

- (1) 池田温「八世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」  
『ユーラシア文化研究』Ⅰ、北海道大学、一九六五年。
- (2) 饒宗頤「穆護歌考」『大公报在港復刊卅周年紀念文集』  
下卷、香港、一九七八年。饒氏著「選堂集林 史林中」香港中華書局、一九八二年。『文叢』（下）、台北、學生書局、一九九一年。
- (3) 姜伯勤「論高昌胡天与敦煌祇寺——兼論其与王朝祭礼的  
關係」『世界宗教研究』一九九三年一期、姜著「敦煌芸術  
宗教与礼樂文明」中国社会科学出版社、北京、一九九六年。
- (4) 柴澤俊「山西琉璃」文物出版社、北京、一九九一年参  
照。
- (5) 陳明達等「两年来山西省新發現的古建築」『文物参考  
資料』一九五四年一期。
- (6) 孔繁成整理「玄神樓和三結義廟」『関于元神廟的伝説』  
『介休文史資料』第三輯、介休、一九九一年六月。



(7) 『介休碑刻資料』第一輯、介休市博物館匯集、一九九一年二月。

(8) 『介休碑刻資料』第一輯、三六頁、李德華氏錄文。本文は萬毅が原碑・原拓本に拠り文字を校定したものによる。

#### 重建三結義廟碑

介邑之東關、有三結義廟、其初非三結義廟也。蓋宋文潯公、特爲祇神建耳。其規制之壯麗、氣象之崢嶸、稱一方鉅觀焉。在當年締造之意、見于平妖傳中者、固非無因。然以之享一方之血食、受」1

萬年之香火、不修且誣乎！第以先賢所建、未敢輕義變置、故久而相安、且相忘也。越大明嘉靖壬辰歲、廷敕天下毀淫祠。惟時邑侯王公奮然曰、祇神之廟、胡爲乎來哉！稽其名號、固經典所未」2

聞、核其功烈、亦祀典所不載。今日淫祠之毀、其在斯乎！其在斯乎！然除邪神、必須崇正神、而後可以彈壓魑魅、抑人諂瀆之心、作人剛大之氣。因思天地間忠廉節義、耿耿不磨、熱有如桃園兄弟、」3

千古爲昭者哉！于是遂以漢昭烈皇帝 關聖帝君 英烈王塑像王殿、而武侯諸賢、配享東西兩廊中、因顏其額曰、三結義廟。此始而爲祇神廟、更而爲三結義廟也。 嗣後人仰聖德之」4

介休の祇神樓と宋元明代山西の祇教

姜伯勤

無私、悚明威之有赫、莖芽高處、歲有常期、百餘年來、未之有歟。迨順治己亥孟夏之初旬八日、興秩節修祀事、越宿事竣、忽于漏下二鼓時、烈焰歘發、煜煜燄燄之勢、熨不可遏。達旦災息、而正殿東」5

廊獻亭樓閣、已盡作咸陽灰燼矣。

其與魯靈光同不朽者、

則僅西廊數楹耳。嗟乎！祖龍煽禍、見之生平傳記者、不可殫述、然皆以人有惡德、故天災隨之。茲何以巍巍廟貌、亦竟供祝融氏」6

之一燎耶？此亦理之甚不可解者矣。雖然、凡人屋舍被焚、罔不思振作、而更新之、所以奠厥居、寧婦子、衍先人之堂構者、勤之不敢懈也。至廟宇災傷、而反聽其廢者不修、缺者不補、俾遺像儼然」7

日飄零風雨之中、其何以妥」8

神靈而肅瞻拜也。況桃園之義、華夏共仰、天下之立廟肖像者、由王畿而達海寓、自州郡而逮窮鄉、何可數計。獨此一方棟宇、因回祿之變而不蚤爲之所將、當日之去邪崇正、更名定位者謂何？」9

理所稱有其舉之、莫敢廢之者謂何？且此廟肇修非獨微 神聽求式谷以女也。南側綿山獻秀、北則汾水環清、一方之風氣聚焉。太皞司令、于此迎神、青衿入闕、于此勸駕、一邑之典故存焉。」10

第八十卷

四四七

此本關紳衿張君煊・文君士興・高君圖南等、鄉耆郝汝相等、啓處莫違、毅然欲以身任之。所慮者功浩費繁、奏績匪易、不啻長河之決、非一手之所能障也。爰集我鄉人士共相商確、而補缺修廢」<sup>11</sup>

之舉、人人實有同心。適值汾守河東道 馮公祖經過廟前、見焦頭爛額之狀、遂慨然發金。而吾邑段父母、復鏡意修葺、爲士民倡、則革故鼎新、端在今日矣。時余亦濫則末座、遂走筆書引、而」<sup>12</sup>

聚財塲工、從此次第舉行焉。工起于順治十七年十月、告成于康熙七年十月、其規制之壯麗、氣象之崢嶸、宛然如舊、故覺煥然改觀矣。康熙十三年甲寅歲陽月之吉、屬余記其事以勒諸石、唯」<sup>13</sup>

唯之曰、是役也、程其期限十年之久、覈其金錢有六十之多、固不僅與尋常修補者可同日而語也、安可無說以處此。至于經營者之苦心、與輸助者之樂善、以及住持之勞瘁、匠作之勤渠、亦俱」<sup>14</sup>

不可泯沒不傳也。余故悉紀而并書之、使後之居此地者、目擊而繼前修、俾萬億斯年、永無傾圮之患。庶于從前改建之意、與今日之重修之意、兩無負云、是爲記、」<sup>15</sup>

大清康熙十三年歲次甲寅孟冬吉日立。(以下署名省略)

(9) 《文潞公家廟碑記》【介休碑刻資料】第一輯、三一—

三五頁。

(10) 陳垣「火祇教入中國考」【國學季刊】一卷一號、一九二三年一月、「陳垣學術論文集」第一集、中華書局、一九八〇年。

(11) この点は張領氏の教示による。

(12) 羅貫中著、張榮起整理「三遂平妖傳」北京大學出版社、一九八三年。

(13) 何竹淇編「兩宋農民戰爭史料匯編」上編第一分冊、北京、一九七六年、二五八—八五頁。

(14) 羅華「醉翁談錄」甲集卷一〈舌耕叙引・小説開辟〉注(11)、〈前言〉一頁。

(15) 姚寬「西溪叢語」中華書局、一九九三年、四一—四三頁。

(16) 唐長孺「魏晉南北朝史論叢」三聯書店、一九五五年、四一六頁。【晉書】卷一〇七石季龍載記附石鑒條參照。「龍驤孫伏都・劉銖等、羯士三千と結び胡天に伏す」とある「胡天」は「祇神」或いは「祇祠」を指す。

(17) Mary Boyce, Zoroastrians. Their Religious Beliefs and Practices. London, Boston and Henley, 1979, P. 10, 11.

(18) B. I. Marshak, Valentina I. Raspopova, Wall

- Paintings from a House with a Granary—Panjikent, 1st quarter of the eighth century A.D. S. R. A. A. I. 1990. 鎌倉 P. 144, 145.
- (19) 伊藤義教『ペルシア文化渡来考—シルクロードから飛鳥へ』岩波書店、一九八〇年、九七頁。
- (20) The Zend-Avesta, Part II (Translated by James Darmesteter). <The Sacred Books of the East> vol. XXIII, Oxford, 1883. (Repr. Delhi, 1981), PP. 231-48.
- (21) Tamara Talbot Rice; Ancient Art of Central Asia. New York, 1965. P. 113.
- (22) Л. Н. Альбазов; Живопись Аппачаба. Тавр-Кент. 1975. 104頁。Л. И. Арибаум『古代サマルカンドの壁畫』加藤九祚訳、東京、一九八〇年、一三六頁。
- (23) 『介休碑刻資料』第一輯、一九九一年、三九—四〇頁。
- (24) The Zend-Avesta, Part II. Delhi. 1981. P233.
- (25) 林悟殊『波斯拜火教与古代中国』台北、新文豐出版公司、一九九五年、五六頁。G. Hoffman, Auszüge aus syrischen Akten Persischer Martyrer. Leipzig, 1880 (Repr. 1966), PP. 296-7, 297.
- (26) 林悟殊『波斯拜火教与古代中国』三—三三頁。
- (27) 伊藤義教訳『アヴェスター』(『世界古典文学全集』第三卷)筑摩書房、一九六七年、三二七—三〇頁。
- (28) 羅豐『固原南郊隋唐墓地』文物出版社、一九九六年、四四頁。
- (29) Л. Н. Альбазов, 同(22) 104頁、訳136頁
- (30) R. A. Jirahzhoi, Oriental Influences in Western Art. London, 1965, P. 205.
- (31) 田邊勝美『ソグド美術における東西文化交流—獅子に乗るナナ女神像の文化交流史的分析—』『東洋文化研究所紀要』一三〇冊、一九九六年三月、二二—二七頁。
- (32) Marshak 他。同(18)
- (33) 田邊勝美、同(31)二四七頁。
- (34) 劉迎勝『絲路文化・草原卷』浙江人民出版社、一九九五年、一九五頁。
- (35) 林悟殊、同(26)一二六頁。『旧唐書』卷一二李晟伝を引く。
- (36) 姜伯勤『論宋元明初山西祇神廟』(『中華學刊』(刊行予定)
- (37) 神田喜一郎『祇教雜考』(『史學雜誌』三九卷四号、一九二八年四月。『東洋學說林』弘文堂、一九四八年収、七五一—九頁。『神田喜一郎全集』第I巻収、同朋舎、一九六六年、七九—八三頁。

- (38) これら元曲等の用例については、神田喜一郎(37)論文および石田幹之助「祇教叢考—神田学士の「祇教雜考」を読みて」『史学雑誌』三九卷六号、一九二八年六月、『東亞文化史叢考』東洋文庫、一九七三年収、二二九—三三三頁参照。
- (39) 凌濛初「譚曲雜割」(中国古典戲曲論著集成)(四)中国戲劇出版社、一九五九年、二五五頁。
- (40) 周德清「中原音韻」(中国古典戲曲論著集成)(一)中国戲劇出版社、一九五九年、二二八頁。
- (41) 朱權「太和正音譜」(中国古典戲曲論著集成)(三)中国戲劇出版社、一九五九年、一六一頁。
- (42) 賀昌群「元曲概論」商務印書館新加坡分館、一九六六年、第五章九二—三頁。
- (43) 任半塘(任二北)「散曲之研究」「元曲研究」収、台北、里仁書局、一九八四年、三三二頁。
- (44) 饒宗頤、同(2)「選堂集林」中冊、四七六頁。
- (45) 「唱論」(中国古典戲曲論著集成)(一)一六一頁。
- (46) 「疆村叢書」収「元詞別集」、宋袞「燕石近體樂府」一卷、第三九冊末収、一葉背—二葉表。(梁氏兩般秋雨庵藏燕石集本)台北、廣文書局、一九七〇年。
- (47) 揚朝美輯「朝野新聲太平樂府」卷六(套數一、祇神急)、北京、文学古籍出版社、一九五五年、一四—一八頁。
- (48) 沙畹・伯希和「摩尼教流行中国考」、馮承鈞訳「西域南海史地考證叢書」第二卷、北京商務印書館、一九九五年、八三頁。E. Chavannes et P. Pelliot, *Un traité manichéen retrouvé en Chine*, JA 10<sup>e</sup> Sér. t. XVIII, II Sér. t. I, 1911, 13. 又中 II<sup>e</sup> Sér. t. I / Mars-Avril, p. 369, 1913. 王延德行記訳注中の言及。
- 【附記】 本稿の主要内容は、姜伯勤教授(一九三八生、中山大学歴史系教授)が日本學術振興会招聘研究員(短期)として、受入機関東洋文庫で一九九七年一月二八日午後講演(スライド使用)されたものである。当日は時間の制約で省略された所がなくなかったが、本稿は一部その後の知見も交え修訂を加えられた漢語原稿により訳出した。なお姜氏の主要著作は、
- 「唐五代敦煌寺戶制度」中華書局、一九八七年
- 「敦煌社会文書導論」新文豐出版公司、一九九二年
- 「敦煌吐魯番与絲綢之路」文物出版社、一九九四年
- 「敦煌藝術宗教与礼樂文明」中国社会科学出版社、一九九六年
- 等がある。